

明恵撰『摧邪輪』卷下 訓・註 試稿(二)

米 澤 実江子

承前(『佛教大学 法然仏教学研究センター紀要』既刊号)

キーワード

明恵・『摧邪輪』・訓読文・註記

【報告範囲】

卷下「八丁裏十行目より十八丁表七行目」(『鎌倉旧仏教』三六八頁上
〜三七二頁)までを挙げ「試稿」とした。

【凡例】

- 一、底本は、佛教大学附属図書館「寛永年間版(貴重書 G極楽寺／377)」とし、始めに書き下し該当箇所を翻刻し、次に書き下しとその註記(通し番号)を挙げた。
- 一、翻刻・書き下しにあたっては、下巻より、通行の字体に改めた。
- 一、翻刻部、【】の内、丁数とオ(ウ)を示す場合は、底本の丁数

とその表(裏)を指し、漢数字と上(下)を示す場合は『鎌倉旧
仏教』翻刻部の頁とその上(下)を指す。

一、へは原割り注。

一、訓読文において、返点・送り仮名は、原則底本に従ったが、送り
仮名は適宜補った。

一、訓読文において、典籍引用部は改行して二文字下げた。また引用
末の「〜云々(云云)」は、「〜、と云々(云云)」とした。

一、訓読文において、明恵の設問とその答えは、それぞれ改行した。

一、註記における引用出典の略称は以下の通りである。

『昭法全』(『昭和新修法然上人全集』)

『浄全』(『浄土宗全書』)

『大正蔵』(『大正新脩大蔵経』)

『望仏』(『望月仏教大辞典』増訂版)

『中仏』(中村元著『広説仏教語大辞典』)

『織田仏』(織田得能著『織田仏教大辞典』)

『大漢和』（諸橋轍次著『大漢和辞典』）

『日国』（『日本国語大辞典』第二版）

『漢和大辞典』（藤堂明保編『学研 漢和大辞典』）

〔付記〕

当研究班課題の底本として、佛教大学附属図書館所蔵本を使用させて頂きました。佛教大学附属図書館のご厚情に感謝申し上げます。

【八丁ウ／三六八頁上】

《翻刻》

問。若如^{シクナラハ}所^ノ言^フ者^ハ、念^ニ仏^ノ善^ハ【九丁才】通^{シテ}多^ニ善^ニ為^レ体^ト。然^ハ者^ハ、何^カ故^ニ前^ニ所^ノ引^ク善^ハ【三六八頁下】導^ル疏^ニ、拳^ニ問^ク端^ニ中^ニ云^ク、備^{シテ}修^ム衆^ノ行^ヲ、但^{シテ}能^ク迴^ス向^ス、皆^{シテ}得^ル往^ル生^ヲ。何^ニ以^テ、仏^ノ光^ヲ普^ク照^ス、唯^ニ摂^ル念^ノ仏^ノ者^ヲ有^ル何^ノ意^ヤ也^ヤ（文）。此^ノ中^ニ、衆^ノ行^ノ外^ニ既^ニ出^ス念^ノ仏^ノ善^ヲ。明^ニ知^ス。二^ノ行^ノ遂^ニ有^リ差^レ別^ト。何^ノ可^キ會^フ之^ヲ乎^ヤ。答^ハ。依^テ善^ノ導^ル意^ニ、世^ノ間^ノ孝^ノ養^ノ父^ノ母^ノ等^ノ善^ヲ、未^レ親^レ縁^ニ如^ク來^ル身^ヲ心^ニ故^ニ、不^レ名^ニ念^ノ仏^ト。然^レ依^テ迴^ス向^ス力^ニ、猶^{シテ}得^ル往^ル生^ヲ。況^ヤ中^ノ品^ノ下^ノ生^ノ人^ノ、雖^{トモ}修^ム世^ノ福^ヲ、未^レ希^ク求^ム出^ル離^ヲ、如^ク此^ノ疎^ク縁^ニ未^レ熟^ク行^ハ、不^レ發^ス三^ノ昧^ヲ、難^シ得^ル一^ノ心^ト。

《訓》

問ふ。若し言ふところのごとくならば、念仏善は、多善に通じて体とす。然らば、何が故ぞ、前に引くところの善導の『疏』に、問端を挙ぐる中に云く、

備さに衆行を修して、ただ能く迴向するに、皆往生を得。何を以てか、仏光普く照すに、ただ念仏者を摂する。何の意か有るや

〈文〉。

此の中に、衆行の外に既に念仏善を出す。明らかに知りぬ。二行遂に差別有り。何ぞ之を会すべきや。

答ふ。善導の意に依るに、世間孝養父母等の善、未だ如来の身心を親縁せざるが故に、念仏と名づけず。然るに、迴向力に依りて、猶し往生を得。況んや、中品下生の人、世福を修すと雖ども、未だ出離を希求せず。此のごときの疎縁未熟の行は、三昧を發せず、一心を得難し。

註

- (1) 善導『觀經疏』、『大正藏』三七、二六八頁上。
- (2) 「一心」、究極の於根底としての心・心を統一すること・精神統一・禪定（『中仏』上、七二頁）。

《翻刻》

迴^ル向^ス位^ニ雖^{トモ}有^リ念^ノ仏^ノ善^ト（本識ノ業種^ヲ為^ス因縁^ト。求生^ノ心^ヲ為^ス次第縁^ト。極樂^ノ依正^ヲ為^ス所縁縁^ト。余法^ノ不^レ碍^ク為^ス増上縁^ト。依^テ此^ニ有^リ念^ノ仏^ノ心^ト生^ル故^ニ、起^ル迴^ス向^ス善^ノ根^ト。往^ル生^ノ淨^ノ土^ノ六^ノ因^ノ四^ノ縁^ノ分^ノ別^ノ義^ヲ、可^シ見^ル孔^ノ目^ノ章^ニ（云云）。非^カ恒^ニ時^ニ相^ニ続^ク故^ニ、謂^ク稱^ニ名^ノ字^ヲ觀^ニ相^ノ好^ニ等^ハ、初^ノ中^ノ後^ノ心^ノ、恒^ニ縁^ニ仏^ノ境^ヲ。如^ク下^ニ彼^ノ廻^ス世^ノ【九丁ウ】善^ノ生^ノ上^ノ等^ノ者^ヲ、後^ノ時^ニ雖^{トモ}縁^ニ縁^ニ仏^ノ境^ヲ、初^ノ中^ノ心^ノ、於^テ余^ノ境^ノ上^ニ一^ニ轉^ス。是^ノ故^ニ、念^ノ仏^ノ外^ニ出^ス之^ヲ也^ト。此^レ亦^{シテ}約^{シテ}一^ノ類^ニ作^ル此^ノ說^ト。一^切未^レ必^ズ例^シ之^ト。

《訓》

廻向の位に念仏の義有りと雖ども（本識^③の業種^④を因縁縁とす。求生の心を次第縁とす。極楽の依正を所縁縁とす。余法不碍を増上縁とす。此に依りて、念仏心生るがこと有るが故に、廻向の善根を起こす。往生浄土の六因四縁分別の義、『孔目章』^⑤を見るべし（云云）。恒時相續に非ざるが故に、謂く、名字を称し相好を觀する等は、初中後の心に恒に仏境^⑥を縁ず。彼の世善を廻らして生ずるかこときは、後の時に仏境を縁ずと雖ども、初中の心、余境の上において転ず。是の故に、念仏の外に之を出すなり。此れもまた、一類に約して此の説を作す。一切、未だ必ずしも之に例せず。

註

- (3) 「本識」、根本的な識・阿頼耶識（『中仏』下、一五四七頁）。
- (4) 「業種」、善悪の業が苦楽の果を生ずることを植物の種子にたとえていう。業が本来の果の種子になることをいう（『中仏』上、四三七七頁）。
- (5) 智儼『華嚴經内章門等雜孔目章』「第三明往生因縁者、謂得往生、由二六因縁成。四縁者、一因縁。二等無間縁、亦云次第縁。三所縁、亦云縁縁。四増上縁。本識業種為因縁、求生心為次第縁、浄土等境為縁縁、余法不礙為増上縁。六因者、一能作因、亦云所作因。二俱有因、亦云共有因。三相應因、亦云自分因。五遍因、亦云遍行因。六異熟果因、亦云報因」、『大正藏』四五、五七七頁上。「四縁」、万物が生ずる場合、広く原因となるものを四種に分類したもの（『中仏』縮刷）五〇八頁）。
- (6) 「仏境」、仏の境地・仏の認識領域（『中仏』下、一四五二頁）。

《翻刻》

是故、善導意、雖以下以稱名ニ為門、所引念仏文中、亦通多善取之。即觀念法門云、問曰、仏勸一切衆生發菩提心、願三生西方弥陀仏国。又勸造阿弥陀像、稱揚礼拝、香華供養、日夜觀想不絶。又勸專念 弥陀仏名 一万二万三万五万乃至十万者、或勸誦 弥陀經 五十二三十五十一百、滿十万遍者、現生得何功德。百年捨報已後有何利益。得生浄土以不。答曰、現生及捨報決定有大功德利益。准依 仏教 顯明五種増上利【十丁才】益因縁。一者滅罪増上縁、二者護念得長命増上縁、三者見仏増上縁、四者撰生増上縁、五者証生増上縁。（乃至）又依灌頂經第三卷説云、若人、受三持三帰五戒者、仏勸天帝、汝差天神六十一人、日夜年月隨逐守【三六九頁上】護受戒之人、勿令獲諸惡鬼神横相惱害。此亦是現生護念増上縁。又如浄度三昧經説云、仏告瓶沙大王、若有男子女人、於二月月六斉日及八王日、向天曹地府一切業道数数一過、受三持齋戒者、仏勸六欲天王、各差二十五善神、常來隨逐守護持戒之人、亦不令有諸惡鬼神横來惱害、亦無横病死亡災障、常得【十丁ウ】安穩。此亦是現生護念増上縁（已上）。

《訓》

是の故に、善導の意は、称名を以て門とすと雖ども、引くところの念仏の文の中に、また多善に通じて之を取る。即ち『觀念法門』に云く、

問ひて曰く、仏、一切衆生を勧めて、菩提心を發して、西方弥陀仏国に生ることを願はしむ。又勧めて、阿弥陀の像を造りて、称

揚礼拜し、香華供養し、日夜に観想して絶へざらしむ。

又勸めて、弥陀仏名を専念せしむること、一万・二万・三万・五万乃至十万せん者、或いは勸めて『弥陀経』を誦すること、十五・二十・三十・五十・一百、十万遍に満せん者、現生に何なる功德をか得る。百年捨報^⑦已後に何の利益か有る。浄土に生ることを得るやいなや。

答へて曰く、現生及び捨報に、決定して大功德利益有り。仏教に准依して五種の増上利益の因縁を顕明かす。一は滅罪増上縁。二は護念得長命増上縁。三は見仏増上縁。四は撰生増上縁。五は証生増上縁。〈乃至〉又『灌頂経』の第三卷の説に依るに、云く、「若し人、三帰・五戒を受持するをば、仏、天帝に勸す。汝、天神六十一人を差して、日夜年月に授戒の人を随逐守護して、諸悪鬼神の横さまに相悩害^⑧することを獲しむること勿れ^⑧。此れもまた是れ、現生護念増上縁なり。

又『浄度三昧経』に説きて云ふがごとし。「仏、瓶沙大王に告ぐ。若し、男子女人有りて、月月の六齋日及び八王日において、天曹^⑨・地府^⑩に向ひて、一切の業道、数数に首過^⑪し、齋戒を受持せん者をば、仏、六欲天王^⑫に勸して、各、二十五の善神を差して、常に來りて随逐し、持戒の人を守護して、また諸悪鬼神、横さまに來りて悩害すること有らしめず。また横病^⑬死亡の災障無くして、常に安穩なることを得^⑭。此れもまた是れ、現生護念増上縁^⑮なり。〈已上〉。

註

- (7) 「捨報」、命終。
- (8) 【参考】『灌頂経』三、『大正蔵』二一、五〇一頁下。
- (9) 「天曹」、天の神（「中仏」下、一一一八頁）。
- (10) 「地府」、豊かな地・冥界・冥土・閻魔王（「日国」八、一三八一頁）。
- (11) 「首過」、自ら己の罪を述べる（『大漢和』十二、四三九頁）。
- (12) 「六欲天」、三界の内、欲界に属する六重の天（四天王主天・娑利天・夜摩天・兜率天・化乐天・化他自在天）（「中仏」下、一七七四頁）。
- (13) 「横病」、不慮の病氣（「中仏」〔縮刷〕一三〇頁）。
- (14) 『浄度三昧経』、【参考】牧田諦亮（監修）・落合俊典（編集）『七寺古逸経典研究叢書』第二卷（大東出版社、一九九六年）。齊藤隆信『浄度三昧経』の研究―『安樂集』と『観念法門』の場合―（『佛教大学総合研究所紀要』三、一九九六年）。
- (15) 善導『観念法門』、『大正蔵』四七、二四頁下〜二五頁下。

《翻刻》

此中既引三帰戒善功德文^ノ為ニ念仏護念縁^ト。明知、念仏善中撰^ニ戒善^ニ也。如戒善^ノ余善亦可^ニ准^レ知^ス。若念仏善通^ニ余善^ニ者、余善中亦撰^ニ念仏善^ニ也。相撰義^ハ如理^ニ可^レ知^ル之^ヲ。是故三念中念仏善文、念仏宗引^ニ之^ヲ為^ス証^ト。然此三念、亦名^ク三帰^ト。是故経中、或云^ニ念仏念法念僧^ト、或云^ニ帰^ト。然此三念、未^レ可^ニ必^シ限^ニ称名^ニ。依^レ之^ト通^ニ多善^ニ立^ル念仏名^ト也。

《訓》

此の中に既に「三帰戒善の功德の文」を引ききて「念仏護念縁」とす。

明らかになりぬ。念仏善の中に戒善を撰するなり。戒善のごとく、余善もまた准知すべし。若し念仏善、余善に通ぜば、余善の中にもまた、念仏善を撰するなり。「相撰の義」、理のごとく之を知るべし。是の故に、三念の中の念仏善の文、念仏宗に之を引きて証とす。

然るに、此の三念、または「三帰」と名づく。是の故に、『經』の中に、或いは「念仏・念法・念僧」と云ひ、或いは「歸仏・歸法・歸僧」と云ふ。然るに「歸仏の義」は、未だ必ずしも称名に限るべからず。之に依りて多善に通じて念仏の名を立つるなり。

註

(16) 『阿弥陀經』、『大正藏』十二、三四七頁上。

(17) 『雜阿含經』、『大正藏』二、二三三頁中

《翻刻》

雖^レ然、善導撰^ハ他善^ニ属^シ称名^ニ作^ル一門^也。然^レ則、善導^ハ尽^シ称名^ノ義、他師^ハ極^ニ諸門^ノ理^ニ。其^ノ尽^ト極^者、即^チ究^ニ竟^ニ無^レ我^ノ義^ヲ開^ス三法^ノ印^道。念^ハ佛^ノ善^根、得^ニ成^立。往^シ生^直路^無岐^徑。諸^ノ經^俱【十一丁オ】為^ス一^佛說。諸^ノ義^同順^一法^印。各^ノ順^一理^ニ。修^ハ行^ニ往^シ生^淨土^無疑^唯念^ハ佛^心為^レ先^者。百^即百^生千^即千^生。縱^ヒ雖^ト称^ニ名^字、無^レ念^ハ佛^心者、千^中一^難得^大綱^是足^得一^察万^此決^若迄^重重^者、專^ニ修^人、定^テ謂^レ非^善導^矣。

《訓》

然りと雖ども、善導は他善を撰して称名に属して一門を作るなり。

然れば則ち、善導は「称名の義」を尽し、他師は「諸門の理」を極む。其の尽極とは、即ち二無我の理を究竟し、三法印の道を開闡す。念仏の善根、成立することを得。往生の直路、岐徑無し。諸經俱に一仏説とす。諸義同じく一法印に順ず。各、一理に順じて修行せば、往生淨土、疑ひ無からん。ただ念仏心を先とせば、百即百生、千即千生。縦ひ名字を称すと雖ども、念仏心無くんば、千が中に一も得難からん。大綱、是に足りぬ。一を得て万を察せよ。

此の決、若し重重に迄ばば、専修人、定んで「善導を非す」と謂はん矣。

註

(18) 「開闡(かいせん)」、ひらきひろめる(『大漢和』十一、七一七頁)。

(19) 「岐徑」、「参考」 「岐道」分かれ道・えだみち(『大漢和』四、二二六頁)。

《翻刻》

問^曰、何^ヲ為^テ撰^取義^乎。答^撰取^者、即^チ是^撰義^也。即^チ撰^者、如^シ菩提^資糧^論第^一積^資糧^義云^上。以^テ持^ヲ為^レ義^也。譬^ハ如^シ世^間共^行、日^撰於^熱月^撰於^冷。撰^ハ是^持義^如是^持菩提^法為^レ菩提^資糧^言【三六九頁下】資^糧者、即^チ是^持義^云云^云。此^亦如^レ是^彌陀^心光^如日^月。行^者念^心如^熱冷^日撰^レ熱^者、同^熱性^故、心^光撰^レ念^心者、同^是念^性

故、月喩亦如是。日不撰冷者、不【十一丁ウ】同性故非可撰法。心光、不撰無念者、不_{ナラニ}同念_ス故、非_キ可_ス撰_ニ法_ニ。

《訓》

問ひて曰く、何をか「撰取の義」とするや。

答ふ。「撰取」とは、即ち是れ「撰の義」なり。即ち「撰」とは、『菩提資糧論』の第一に「資糧⁽²⁰⁾の義」を釈して云ふがごとし。

「持」を以て義とす。譬へば、世間に共に行ずるに、日に熱を撰し、月に冷を撰するがごとし。「撰」は是れ「持の義」なり。是のごとく菩提を持する法を「菩提の資糧」とす。「資糧」と言ふは、即ち是れ「持の義」なり（云云）。

此もまた是のごとし。弥陀の心光は日月のごとし。行者の念心は熱冷のごとし。

日に熱を撰するは、同じく熱性なるが故に、心光、念心を撰するは、同じく是れ念性なるが故に、月喩もまた是のごとし。

日に冷を撰せざるは、同性ならざるが故に撰すべき法に非ず。心光、無念を撰せざるは、同念ならざるが故に撰すべき法に非ず。

註

- (20) 「資糧」、準備や素材の意・修行の基となる善根や功德を云う・材料（『中仏』中、九三一頁）。
- (21) 『菩提資糧論』、『大正蔵』三三、五一七頁中下。

《翻刻》

謂、広歴諸法_ニ言_レ之_者、謂、就_カ四大種_ニ者、水大種。成_ス撰_ノ用_ヲ。謂、令_{シテ}離_ル散_ル極_ニ微_ニ撰_レ之_成一_聚也。就_テ心王_ニ言_レ之_者、謂、阿頼耶識、撰_{シテ}諸_ノ法_ノ種子_ヲ生_ス現_行。就_テ心所_ニ言_レ之_者、謂、念_ノ心所_{ナリ}。撰_ニ持_ニ所_縁令_レ不_ラ忘_セ。如_レ此_ノ歴_テ方_境衆_多。今_言撰_取者、謂、仏は大_覺円_満聖_者、衆_生是_レ無_明未_悟凡_夫。迷_悟既_隔、如_極微_離散。然_念仏_心、印_ニ持_{シテ}仏_境置_ク迷_心中_ニ、如_水大_種撰_ニ持_{スル}極_微。是_故、衆_生称_ニ念_{スレハ}仏_ニ、亦_俱時_成撰_取用_ヲ。名_字影_{カヒ}衆_生舌_端、法_体入_ル衆_生心_想中_ニ。如_下有_ニ本_質鏡_現影_像。是_謂撰_取義_ト。善_導三_縁義_{、准}此_可【十二丁ウ】知_ル。

《訓》

謂く、広く諸法に歴て之を言はば、謂く、四大種に就かば「水大種」なり。撰の用を成す。謂く、離散の極微をして之を撰して一聚を成せしむるなり。

心王⁽²³⁾に就きて之を言はば、謂く、阿頼耶識、諸法の種子を撰蔵して現行を生ず。

心所⁽²⁴⁾に就きて之を言はば、謂く、念の心所なり。所縁を撰持して、忘せざらしむ。此のごとく万境に歴て衆多なり。今「撰取」と言ふは、謂く、仏は是れ大覚円満の聖者、衆生は是れ無明未悟の凡夫なり。迷悟既に隔たるは、極微の離散せるがごとし。然るに念仏の心、仏境を印持して迷心の中に置くは、水大種の極微を撰持するがごとし。是の故に、衆生、仏を称念すれば、また俱時に「撰取の用」を成す。名字、衆生の舌端に影び、法体、衆生の心の中に入る。本質有れば、鏡に

影像を現するがごとし。是を「摂取の義」と謂ふ。善導の三縁の義、此に准じて知るべし。

註

- (22) 「四大種」、四種の元素(地・水・火・風)、『中仏』中、六八一頁。
- (23) 「心王」、心作用の根本となるもの・意識作用の本体(『中仏』中、九七二頁)。
- (24) 「心所」、心のはたらき・精神作用(『中仏』中、九五七頁)。

《翻刻》

拳^テ要^ヲ言^ハ之^ノ者、三業、常恒^ニ順^ル仏境^ニ也。如^シ清涼大師出^シ齊州^ノ大行禪師念^ハ仏行^ニ云^ク。四字教詔、謂^ク、信憶^ノ二字、不離^レ於^レ心^ニ、称^シ敬^ノ両字、不^レ離^レ身口^ニ。彼論云、往生^ニ淨土^ニ、要^ス須^ク有^レ信。若^シ信、千^即千生、万^即万生。信^シ仏名字^ヲ、不^レ離^レ心口^ニ、諸^レ仏即救^ス、諸^レ仏即護^ス。心恒^ニ常憶^ヒ、口常^ニ称^シ名^ヲ、身恒^ニ常敬^ヒ、始^メ名^ヲ深信^ト。任意^ニ早晚^ニ、終^ニ無^ク再住^ル閻浮^ニ之法^ト。此策^ニ初心^ヲ、最^モ為^ス要^ト也(『已上』)。善導^ノ解釈亦准^シ此^ニ可^レ知。

《訓》

要を挙げて之を言へば、三業、常恒に仏境に順ずるなり。清涼大師、齊州の大行禪師の念仏の行を出して云ふがごとし、

四字の教詔に謂く、「信・憶」の二字、心を離れず。「称・敬」の両字、身口を離れず。彼の『論』に云く、淨土に往生せんに、要ずすべからく信有るべし。若し信あれば、千即千生、万即万生。

仏の名字を信じて、心口を離れざれば、諸仏即ち救ひ、諸仏即ち護す。心に恒常に憶ひ、口に常に名を称し、身に恒常に敬ひ、始めなれば、深信と名づく。意の早晩に任せて、終に再び閻浮に住するの法無し。此れ初心を策すに、最も要とするなり(『已上』)。善導の解釈もまた此に准じて知るべし。

註

- (25) 【参考】『往生西方淨土瑞応伝』、『大正蔵』五一、一〇五頁下。
- (26) 「教詔(きょうしゅうしやう)」、教えつげる(『大漢和』五、五〇五頁)。
- (27) 澄観『演義鈔』、『大正蔵』三六、六六七頁上。

《翻刻》

是^レ故^ニ、三業、依^テ順^ル仏境^ニ、蒙^カ弥陀心光^ノ摂取^ヲ故^ニ、云念^ハ仏衆生^ノ摂取^ヲ不捨^ト。於^テ身光照^ル觸^ニ、非^レ有^レ彼此^ノ分限^ニ也。是^レ故^ニ六時^ニ礼讚^ス、弥陀身【三七〇頁上】色如金山、相好光明照十方、唯有念^ハ仏蒙^カ光接^ヲ、当知【十二丁ウ】本願^ノ最^モ為^ス強、等^ノ文亦准^シ觀念^ノ法門^ニ可^レ成一^ノ義。即言^ハ照十方^ノ者、十方衆生也。言蒙^カ光接^ヲ者、指^シ心光^ト也。若不^レ爾^者、一師^ノ解^キ釈、何^レ成^ル梓^ノ楯^ニ乎。今所^レ成^ス義、五翻^ノ中、依^テ異^ニ事^ノ翻^ト。謂^ク、蒙^カ光接^ヲ一言^ノ下有^二義^一。一身光、二心光也。今、会^シ取^テ順理^ノ正義^ト、即^チ為^ス心光^ト也。七例^ノ中、是^レ第三^ノ例。蒙^カ光接^ヲ義、正^シ依^テ心光^ノ位^ニ本^ノ説^ト。況^シ云^ク光接^ヲ不^レ云^ク光照^ト。即^チ指^シ摂^ヲ念^ト也。如^キ彼^ノ云^ク彼^ノ仏心光^ノ常照^ス是人^ト一^等者、体用^ノ俱約^シ譬^ヲ説^ト也。今、法^ヲ譬^ヲ双^ニ拳^ト、体用^ノ合^シ明^ト。即^チ光^者譬^也。接^者法^也。光^者体^也。接^者用^也。義[、]准^シ可^レ

知。阿毘達摩法相、如是。更可止迷倒也。

《訓》

是の故に、三業、仏境に順ずるに依りて、弥陀心光の摂取を蒙るが故に「念仏衆生摂取不捨」と云ふ。身光の照触においては、彼此の分限有るに非ざるなり。是の故に『六時礼讃』の

弥陀身色如金山、相好光明照十方、唯有念仏蒙光接、当知本願最為強。

等の文もまた『観念法門』に准じて一義を成すべし。即ち「照十方」と言ふは「十方の衆生」なり。「蒙光接」と言ふは「心光」を指すなり。若し爾らずんば、一師の解釈、何ぞ梓楯を成ぜんや。

今、成ずるところの義は、五翻の中には「異事翻」に依る。謂く、「蒙光接」の一言の下に二義有り。一は身光、二は心光なり。今、会して、順理の正義を取りて、即ち「心光」とするなり。七例の中には、是れ第三例。「蒙光接の義」、正しく心光の位本に依りて説く。況んや「光接」と云ひて「光照」と云はざるをや。即ち「摂念」を指すなり。彼の「彼仏心光常照是人」と云ふがごとき等は、体用、俱に譬に約して説くなり。

今は、法譬双べて挙げ、体用合して明す。即ち「光」とは「譬」なり。「接」とは「法」なり。「光」とは「体」なり。「接」とは「用」なり。義、准じて知るべし。阿毘達摩の法相、是のごとし。更に迷倒を止むべきなり。

註

(28) 善導『往生礼讃偈』、『大正蔵』四七、四四六頁中。

(29) 「異事翻」、【参考】智儼『華嚴五十四問答』「翻依有レ五。一相望翻、相形取義故。二増字翻、加レ字会レ義故。三会意翻、以レ意会レ義故。四借勢翻、如羝羊鬪将前而更却等。五異事翻、於一名下有二義事而会取レ正故』、『大正蔵』四五、五三五頁中下。

(30) 「七例」、【参考】法蔵『探玄記』「若欲尋讀内外典籍。要解声論八転声法。若不明知。必不能知文義分齊。一補盧沙、此是直指陳声、如人斫樹指説其人。二補盧私、是所作業声、如所作斫樹。三補盧患拏、是能作具声、如由斧斫。四補盧沙耶、是所為声、如為人斫。五補盧沙頽、是所因声、如因人造舍等。六補盧殺姿、是所屬声、如奴隶主。七補盧鍛、是所依声、如客依主。瑜伽第二、名上七種為七例句』、『大正蔵』三五、一四九頁上中。

(31) 「第三例」、補盧患拏（ふるしやな）、具声（具格）、よによつて（『織田仏』一四五四頁）。

(32) 善導『観念法門』、『大正蔵』四七、二五頁中。

《翻刻》

然、汝集出此等文、令身光不照十方衆【十三丁オ】生亦不三分身心二光。若如汝所解者、令弥陀如来有大悲不遍之過。又令四十八願無称性之徳。汝非造書述此義、仮図象顯此意趣、名摂取不捨漫荼羅。中央図阿弥陀如来。光明照十方。周匝図在家出家諸人。在家称名諸人受光照。出家雜善行人不蒙照触。此像、処処遍滿無情愚人等、悉皆信伏之。称名行不専一。不法過日熾盛。以此為往生淨業、以此為深信至極。非唯輕聖道仏法、還亦贖淨土門行。

《訓》

然るに、汝が『集』に此等の文を出して、身光をして十方の衆生を照さざらしむもまた身心の二光を分かつた。若し汝が所解のごとくならば、弥陀如来をして大悲不遍の過有らしむ。又、四十八願をして称性の徳無からしむ。

汝、書を造り、此の義を述ぶるのみに非ず。画像を仮りて此の意趣顯わす。「撰取不捨の漫荼羅」と名づく。中央に阿弥陀如来を図す。光明、十方を照す。周匝して在家・出家の諸人を図す。在家称名の諸人は光照を受く。出家雑善の行人は照觸を蒙らず。此の像、処処に遍満せり。情け無き愚人等、悉く皆之を信伏す。

称名の行は専一ならず。不法の過は日びに熾盛なり。此を以て往生の淨業とし、此を以て深信の至極とす。ただ聖道の仏法を軽むるのみに非ず、還りてまた浄土門の行を躓せり。

註

(33) 法然『選択集』、『昭法全』三二七頁。

《翻刻》

專修人、問曰、觀經說第十一勢至觀中云、以智慧光普照一切、令離三塗得無上力。是故号此菩薩名大勢至。《文》。善【十三丁ウ】導和尚、积云、七明光之体用。即無漏為体故名智慧光。又能除息。十方三惡三苦名無上力。即為用也。等【三七〇頁下】《云云》。

案 积意曰、此上經文云、次觀大勢至菩薩。此菩薩、身量大小、亦如觀世音。円光面、各百二十五由旬、照二百五十由旬。举身光明、照十方国作紫金色。有縁衆生、皆悉得見。但見此菩薩一毛孔光、即見十方無量諸仏淨妙光明。是故、号此菩薩名無辺光。《已上》。此次以智慧光等文来。是故、此积中言光之体用者、上所説身光、無漏為体、息苦為用。就中智慧光者、就体立名也。即有為無漏道諦攝故、言智慧光也。《為言》。

《訓》

專修人、問ひて曰く、『觀經』に「第十一勢至觀」を説く中に云く、智慧の光を以て普く一切を照して、三塗を離れ、無上力を得しむ。是の故に、此の菩薩を号して「大勢至」と名づく。《文》。

善導和尚、积して云く、

七に光の体用を明す。即ち無漏を「体」とするが故に「智慧光」と名づく。又能く、十方の三惡・三苦を除息するを「無上力」と名づく。即ち「用」とするなり、等《云云》。

积の意を案じて曰く、此の上の『經』文に云く、

次に大勢至菩薩を觀ず。此の菩薩、身量大小なるもまた觀世音のごとし。円光の面、各、百二十五由旬、二百五十由旬を照す。身(36)の光明、十方の国を照して紫金色と作る。有縁の衆生、皆悉く見ることを得。ただ此の菩薩の一毛孔の光を見れば、即ち十方無量の諸仏の淨妙の光明を見る。是の故に、此の菩薩を号して「無辺光」と名づく。《已上》。

此の次に、「以智慧光」等の文来れり。是の故に、此の积の中に

「光の体用」と言ふは、上の所説の「身光」、「無漏」を「体」とし、「息苦」を「用」とす。中に就きて「智慧光」とは、「体」に就きて名を立つるなり。即ち「有為無漏道諦の摂」なるが故に「智慧光」と言ふなり（為言）。

註

- (34) 『観経』、『大正蔵』十二、三四四頁上。
- (35) 善導『観経疏』、『大正蔵』三七、二六九頁上。
- (36) 「举身」、全身にわたって・体中（『中仏』上、四八七頁）。
- (37) 『観経』、『大正蔵』十二、三四四頁上。

《翻刻》

然者、今【十四丁オ】所レ言心光義亦可レ例レ此。非下弥陀身光、無漏為レ体故、拳四智相応淨識^ヲ為^{シテ}身光^ト云^ニ心光^ト乎。望^メ地上菩薩識所変^ニ淨土諸境、雖^{トモ}通有漏無漏、今善導意、且拳無漏義^ヲ。無漏義亦雖^{トモ}通心境、善導意亦取無漏心心所法。是故^ニ積^ル勢至觀、就經說取淨識相応心所^ヲ積^{スルニハ}。弥陀身光、雖^{トモ}無^レ文、依^テ理出^{シテ}心王淨識云心光^ト。此即可^レ云^フ出^ス身光^ト也。

《訓》

然らば、今言ふところの「心光の義」もまた此に例すべし。弥陀の身光、無漏を体とするが故に、四智相応の淨識^ヲを挙げて「身光の体」として「心光」と云ふには非ずや。

地上の菩薩の識所変に望めば、淨土の諸境、有漏・無漏に通ずと雖ども、今善導の意は、且く無漏の義辺を挙ぐ。無漏の義もまた心境に通ずと雖ども、善導の意もまた無漏の心・心所の法を取る。是の故に「勢至觀」を積するには、『經』説に就きて淨識相応の心所を取る。

「弥陀の身光」を積するには、文無しと雖ども、理に依りて心王淨識を出して「心光」と云ふ。此れ即ち「身光の体」を出すと云ふべきなり。

註

- (38) 「四智」、「法智、類智、他心智、世俗智」迷いを断ずる四種の智慧（『中仏』中、六八四頁）。
- (39) 「淨識」、無漏の識・清らかな阿頼耶識（『中仏』中、八五七頁）。

《翻刻》

然者、我之所^レ圖^ル曼荼羅、何^レ為^レ謬^乎、如何。答。此救、不可^レ然。勢至觀經文、連^ニ統^{シテ}名無辺光^ト言^フ以智慧光^ト等。所以、善導^レ積^ル明^ニ上身光^ト也。第九觀中、不^レ云智慧光、唯云念仏衆生^ヲ不捨。於八^ノ字中、下四字【十四丁ウ】即弥陀慈念功用也。仏地色心、俱雖^{トモ}尊高^ニ慈念功徳約^ル意業^ニ故、摂取不捨^ノ言、全不闕^ル身光^ト。是故、身光照十方衆生^ヲ。顯大悲普遍徳。心光^ヲ摂^ル専念行者^ヲ。成^{セリ}感^ル心必然義。善導宗義、如^シ是。觀念法門^ノ解^ル積、如^シ向^ル鸞鏡^ニ。

《訓》

然らば、我が図するところの曼荼羅、何ぞ謬とせんや。如何。

答ふ。此の救い、然るべからず。勢至觀の『經』文、「名無辺光」の文に連続して「以智慧光」等と言ふ。所以に、善導「上の身光の体を明す」と釈したまへり。

第九觀の中には「智慧光」と云はず、ただ「念仏衆生撰取不捨」と云ふ。八字の中において、下の四字は即ち弥陀慈念の功用なり。

仏地の色心、俱に尊高なりと雖ども、慈念の功德は「意業」に約するが故に、「撰取不捨」の言、全く「身光」に関せず。

是の故に、「身光」は十方の衆生を照す。大悲普遍の徳を顕す。

「心光」は専念の行者を撰す。感応必然の義を成せり。

善導の宗義、是のごとし。『觀念法門』の解釈、鸞鏡に向へるがごとし。

註

(40) 『觀經』、『大正藏』十二、三四四頁上。

(41) 善導『觀經疏』、『大正藏』三七、一六九頁上。

(42) 『觀經』、『大正藏』十二、三四三頁中。

(43) 「仏地」、仏果・仏の境界・仏位（『中仏』下、一四五三頁）。

(44) 「色心」、色法と心法・物と心・物質と精神・「色」は有相可見、「心」は無相不可見（『中仏』中、六三三三頁）。

(45) 善導『觀念法門』「如第九真身觀說云。弥陀仏金色身毫相光明遍照十方衆生。身毛孔光亦遍照衆生。円光亦遍照衆生。八万四千相好等光亦遍照衆生。又如前身相等光、一一遍照十方世界。但有專念阿弥陀仏衆生。彼仏心光常照是人撰護不捨。総不論照撰余

雜業行者。此亦是現生護念増上縁、『大正藏』四七、二五頁上中。

(46) 「鸞鏡（らんきょう／らんけい）」、かがみ（『大漢和』十二、八九一頁）。

《翻刻》

若不_レ然者、有_レ何_レ用_二五_レ処_一遍照_二文_外可_レ云_二但有_レ専念等_一乎。若成_二此_レ義_一者、聞_二念_レ仏_一名字_二人_一、倍可_レ増_二信_レ敬_一。若如_二汝_レ義_一者、【三七一頁上】令_二弥陀_レ如_レ来_一有_レ愛_レ増_二過_一。生_レ機_二衆_レ生_一、豈得_レ入_二弥陀_レ願_レ海_一乎。更可_レ止_二迷_レ倒_一也。若如_二汝_レ所_レ解_レ者、我亦_レ欲_レ図_二一_レ弥陀_レ撰_レ取_二曼_レ荼_レ羅_一。謂_レ、如_二前_レ所_レ出_一。觀_レ經_二并_レ善_レ導_レ解_レ釈_一中、口_レ稱_二憶_レ念_レ差_レ別_一。其_レ中_二語_レ意_レ合_レ取_レ之_レ者、唯_レ為_二一_レ念_レ仏_一三_レ昧_一。【十五丁才】其_レ旨_一、如_二上_レ成_一。

《訓》

若し然らずんば、何の用有りてか「五処の遍照の文」の外に「但有専念」等と云うべきや。

若し此の義を成ぜば、念仏の名字を聞かん人、倍_増信敬を増すべし。

若し汝が義のごとくならば、弥陀如来をして愛_増増の過有らしむ。生機の衆生、豈に弥陀の願海に入ることを得んや。更に迷倒を止むべきなり。

若し汝が所解のごとくならば、我もまた一の弥陀撰取の曼荼羅を圖せんと欲ふ。謂く、前に出すところのごとし。

『觀經』並びに善導の解釈の中に、口稱・憶念、差別せり。其の中に「語」「意」合して之を取らば、ただ一の念仏三昧とす。其の旨、

上に成ずるがごとし。

註

- (47) 「五処の遍照の文」・「但有専念」、『観念法門』、『大正蔵』四七、二五頁上〜中。
- (48) 「攝取不捨曼陀羅」、『摧邪輪』卷下、『鎌倉旧仏教』三七〇頁上。
- (49) 「一の念仏三昧」、『摧邪輪』卷上、『鎌倉旧仏教』三二八頁下〜三二九頁上。

《翻刻》

又、善導^ノ観念法門^ニ引^テ六部^ノ往生^ヲ經^ヲ、明^ス五種^ノ増上^ノ縁^ヲ義^ヲ、多出^ク観念^ニ想利益^ヲ文^ヲ為^シ念^ス仏^ノ功德^ト。然^ル般舟^ノ三昧^ハ經^ニは六部^ノ之^レ随^ニ一^也。彼^ノ經^中、挙^テ丈夫^ノ、念^ス須門^等三^ノ女人^ノ譬^ヲ喩^シ、説^ク念^ス仏^ノ義^ヲ以^テ心^ヲ念^ス為^シ主^ト、終^ニ明^ス發^ス得^ス三^ノ昧^ノ義^ヲ。善導^ノ法事讚^ニ出^ス召^ス請^ス詞^ニ發^ス句^ニ云^ク、般舟^ノ三昧^ヲ樂^シ願^シ往生^ス。

《訓》

又、善導の『観念法門』に六部の往生^{⑤⑩}を引きて、五種増上縁^{⑤⑪}の義を明すに、多く観念想利益の文を出して念仏の功德とす。

然るに、『般舟三昧経』は是れ六部の随一なり。彼の『経』の中に、丈夫、須門等の三女人を念ずる譬喩を挙げて、念仏の義を説きて、「心念」を以て「主」とし、終に三昧を發得する義を明す。

善導の『法事讚』に召請の詞を出す發句に云く、
般舟三昧行願往生^{⑤⑫}、と。

註

- (50) 「六部往生経」、『無量寿経』・『観経』・『阿弥陀経』『般舟三昧経』・『十往生経』・『浄土三昧経』・『観念法門』、『大正蔵』四七、二四頁下。
- (51) 「五種増上縁」、滅罪増上縁・護念得長命増上縁・見仏増上縁・撰生増上縁・証生増上縁、『観念法門』、『大正蔵』四七、二四頁下。
- (52) 善導『観念法門』、『大正蔵』四七、二四頁下。
- (53) 善導『般舟三昧経』、『大正蔵』十三、九〇五頁上〜中。
- (54) 善導『法事讚』、『大正蔵』四七、四二五頁上〜中。

《翻刻》

又、観経^ノ疏^ニ并^ニ観念法門^ニ、積^ス身光^ヲ照^シ一切^ヲ、心光^ヲ撰^シ念^ス仏^者者^ハ、能^ク所^ク撰^ス取^ル義^ヲ、心念^ヲ勝^ル故^也。若^シ爾^者者^ハ、約^シ合^ニ門^ニ者^ハ、語^意雖^レ無^ニ差^別、約^シ離^ニ門^ニ者^ハ、心念^ヲ是^レ為^シ勝^ト。如^ク観^ス仏^ノ三昧^ノ經^ノ第三^ニ云^ク、稱^ス南無^ト仏^ト、所^ク得^ル果^報、今^ニ於^テ我^ノ世^ニ現^ニ前^ニ受^レ記^ヲ。何^ニ況^ヤ、正^シ念^シ思^フ惟^ニ仏^者者^ハ〈文〉。如^ク是^レ文^ニ証^シ、非^ズレ^ニ。此^レ復^シ如^ク上^ニ【十五丁ウ】成^ス一^カ。

《訓》

また、『観経の疏』並びに『観念法門』に、「身光は一切を照し^{⑤⑬}」、「心光は念仏者を撰す^{⑤⑭}」と積するは、能所撰取の義、「心念」勝るが故なり。若し爾らば、「合門」に約せば「語」「意」差別無しと雖ども、「離門」に約せば「心念」是れ勝れたりとす。

『観仏三昧経』の第三に云ふがごとし、
南無仏と稱するに、得るところの果報、今、我が世において現前に記を受く。何に況んや、仏を正念して思惟せん者をや^{⑤⑮}〈文〉。

是のごとくの文証、一に非ず。此れまた上に成ずるがごとし。

註

- (55) 【参考】善導『観経疏』「明光体柔軟等照一切」、『大正蔵』三七、二六八頁下。
(56) 【参考】善導『観念法門』「彼仏心光常照是人」、『大正蔵』四七、二五頁中。
(57) 『観仏三昧海経』、『大正蔵』十五、六六一頁下。
(58) 「合門・離門」、【参考】「離合」、『摧邪輪』卷中、『鎌倉旧仏教』三六〇頁下〜三六一頁上。

《翻刻》

就善導宗義、以心念非不為本。然者、我令弥陀光明照触観念行者、欲隔称名行者。如何。汝、捨心念取称名者、如捨種求菓。我取深捨浅者、且可成捨劣得勝一義。此為懲汝狭心、且設仮説。実非謂隔称名行者。莫驚、莫驚矣。

《訓》

善導の宗義に就くに、心念を以て本とせざるに非ず。然らば、我れ、弥陀の光明をして観念の行者を照触せしめて、称名の行者を隔てんと欲ふ。如何。

汝、心念を捨てて称名を取るは、種を捨てて菓を求むるがごとし。我れが深を取りて浅を捨つるは、且く「捨劣得勝の一義」を成すべし。此れは汝が狭心を懲しめんが為に、且く仮説を設く。実に「称名

の行者を隔つ」と謂ふには非ず。驚くこと莫れ、驚くこと莫れ。

註

- (59) 「捨劣得勝」、【参考】窺基『成唯識論掌中樞要』「開唯識示我法。此上総解開示二字。下有二十釈。(中略)。八捨劣得勝。(中略) 令達二二空捨生死劣法得勝仏位菩提」、『大正蔵』四三、六一六頁下〜六一七頁上。

《翻刻》

専修人、問曰、我所存義、全不言不取心念。如汝之所責。三心具足。我等共許之。然此三心非必菩提心。但是信解願欲之心也。然所立意趣、弥陀名号、有不思議功力之故、設雖無菩提心、唯一向専称速得往生。設雖有菩提心、不称仏号者、是雜行故、難得往生。所以以此説者、近代、無道心之人、若道心【十六丁オ／三七一頁下】為先者、難入淨土門。若聞此旨者、可有念仏之人。作此集述此義之意趣、甚依之也。汝押破此義、以菩提心為先者、誰人有菩提心入淨土門耶。如何。

《訓》

専修人、問ひて曰く、我が所存の義、「全く心念を取らず」と言はず。汝が責むるところのごとし。三心具足す。我等共に之を許す。然るに此の三心は必ずしも菩提心に非ず。ただ是れ信解願欲の心なり。然るに所立の意趣、弥陀の名号、不思議の功力有るが故に、設ひ菩提

心無しと雖ども、ただ一向に専称すれば、速やかに往生を得。設ひ菩提心有りと雖ども、仏号を称せずんば、是れ雜行なるが故に、往生を得難し。

此の説を作す所以は、近代、道心無きの人、若し道心を先とせば、浄土門に入り難し。若し此の旨を聞かば、念仏するの人有るべし。

此の『集』を作りて、此の義を述ぶるの意趣、甚だ之に依るなり。汝、押して此の義を破して、菩提心を以て先とせば、誰人か菩提心有りて浄土門に入らんや。如何。

《翻刻》

答。言菩提心ニ種類不同。有縁発心、有解発心、有三行発心等種類。如前出。然依善導意、浄土宗、尤可取縁発心。其旨如上成。此縁発心、香象大師、名捨邪趣正発心。翻無始癡心、始向正道故。然此縁発心、委細言之、可通三乘。有下生浄土ニ証小果ニ類上故。

《訓》

答ふ。菩提心を言ふに種類不同なり。縁発心有り。解発心有り。行発心等の種類有り。前に出すがごとし。然るに善導の意に依るに、浄土宗、尤も縁発心を取るべし。其の旨、上に成するが如し。

此の縁発心は、香象大師「捨邪趣正発心」と名づく。無始の癡心を翻じて、始めて正道に向ふが故に。然も此の縁発心、委細に之を言はば、三乗に通ずべし。浄土に生じて小果を証する類有るが故に。

註

(60) 『摧邪輪』卷上「華嚴表公、出四発心。一縁発心、謂仰縁菩提而発心求、名縁発心、未入位前也。二解発心、謂解一切法悉是菩提、名解発心、十信十解位也。三行発心、謂一切行皆合菩提、名行発心、十行十向位也。四体発心、亦名証発心。謂証一切性、即是菩提自体顯發、名為体発心也。初地已上至金剛心是也」(表員『華嚴經文義要決問答』、『中新纂統藏經』八、四二七頁中)、『鎌倉旧仏教』三二〇頁下。

(61) 『摧邪輪』卷上「決曰、所引寿経並礼讚、既有歡喜踊躍之言、何簡菩提心乎。設委解菩提心之行相時、此文雖非指解発心行発心等、歡喜踊躍之文、何非縁発心乎」、『鎌倉旧仏教』三三八頁下。
(62) 法藏『大乘起信論別記』、『大正藏』四四、二九〇頁中。

《翻刻》

然經論所説、多分説大乘菩提心。是殊勝故、為令人向大乘故。小善提下劣故、入二乘道者、諸仏所呵故、於諸經論中、広不讚之。是【十六丁ウ】故、懷感師、中品往生人、言無菩提心者、指無上大菩提心。然言至心発願者、言指大菩提心。汝又不許以至心発願為因上乎。然者、此至心発願者、可当縁発心。諸樂往生輩、誰人無此心乎。如上出大日経所説、初発心、既未分別邪正是非、豈足為難乎。然者、何依菩提心為先、難入往生門乎。

《訓》

然も經論の所説、多分に大乘の菩提心を説く。是れ殊勝なるが故に、人をして大乘に向はしめんが為の故に。小善提は下劣なるが故に、二

乗道に入るは、諸仏の呵するところなるが故に、諸経論の中において
広く之を讃ぜず。是の故に、懷感師、「中品往生の人、菩提心無し」
と言ふは、無上大菩提心を指す。然るに「至心発願」と言ふは、「大
菩提心を指す」と言ふ。汝また「至心発願」を以て因とすと許さずや。
然らば、此の「至心発願」とは、縁発心に当るべし。諸の往生を樂は
ん輩、誰人か此の心無からんや。

上に出す『大日経』所説の如し。初発心、既に未だ邪正是非を分別
せず。豈に難とするに足らんや。然らば、何ぞ菩提心を先とするに依
りて往生門に入り難からんや。

註

(63) 懷感『群議論』「以四十八弘誓願中説(中略)此願中既言。發菩提
心修諸功德(中略)中品等三人猶未發無上菩提心。但是修諸功德
願欲生者。雖得往生。仏不來迎。不違本願。以不發菩提心、
『大正藏』四七、六八頁上。

(64) 『摧邪論』卷中「如大日経第六三三摩耶品第二十五云、仏言、有
三種法、相統除障相応生、名三三摩耶。云何彼法相統生。所謂初
心不観自性、從此發慧、如実智生離無尽分別網、是名第二心菩
提相無分別正等覺句。秘密主、彼如実見已、観察無尽衆生界、悲自
在転、無縁観菩提心生。所謂離一切戲論、安置衆生、皆令住於無
相菩提、是名三昧耶句(已上経文)。(中略)此中所説菩提心、四
發心中当縁發心。未分別邪正是非。但有求仏之心、良以有称性
信心者、誰何不如此之乎、『鎌倉旧仏教』三四三頁下、三四四頁上
／『大日経』、『大正藏』十八、四二頁中。

《翻刻》

問。爾者、諸経論、何故以菩提心為難起乎。如何。答。宿善深
厚。有大種姓。人易發故、云不難也。若無宿善。小心小姓者、雖
遇善友、不肯聞深法、無由起此心、唯雖有厭苦欣樂之心、
更無樂仏境之志。諸経論、依此義説難發也。今唯約大種
七丁才。姓人作此説而已。

《訓》

問ふ。爾らば、諸経論に、何が故ぞ菩提心を以て起こし難しとする
や。如何。

答ふ。宿善深厚にして大種姓有る人は起こし易きが故に難とせず、
と云ふなり。若し宿善無くして小心小姓なる者は、善友に遇ふと雖ど
も、深法を聞くことを肯せず、此の心を起すに由し無し。ただ厭苦欣
樂の心有りと雖ども、更に仏境を樂ふの志無し。諸経論、此の義に依
りて「發し難し」と説くなり。今はただ大種姓の人に約して此の説を
作す而已。

《翻刻》

是故、所以以付属名号者、深察宗趣、設雖無余行、念心甚深者、
可往生也。於其念心、以菩提心【三七二頁上】可為根本也。然何
以菩提心可云抑念仏耶。檢抑字者、玉篇云、損也。即是菩提
心云損念仏也。若爾者、被損菩提心名号者、可為天魔波旬之
名号。豈以阿弥陀如来非為天魔波旬乎。非謂諸仏之怨敵乎。

勿レ謂、勿レ謂。上品円満之邪見、何事過レ之乎。

《訓》

是の故に、名号を付属する所以は、深く宗趣を察するに、設ひ余行無しと雖ども、念心甚深ならば、往生すべきなり。其の念心において、菩提心を以て根本とすべきなり。然るに何ぞ「菩提心を以て念仏を抑う」と云ふべきや。

「抑」の字を撿ぶれば、『玉篇』に云く、「損する」なり。即ち是れ「菩提心、念仏を損す」と云ふなり。若し爾らば、菩提心に損せ被るる名号は、天魔波旬の名号とすべし。豈に阿弥陀如来を以て天魔波旬とするに非ずや。諸仏の怨敵と謂ふに非ずや。謂ふこと勿れ、謂ふこと勿れ。上品円満の邪見、何事か之に過ぎんや。

註

- (65) 法然『選択集』「凡散善十一人、皆雖貴而於其中、此四箇行当世之人殊所欲之行也。以此等行殆抑念仏」、『昭法全』三四三頁。
- (66) 『大広益会玉篇』六、【参照】末木文美士「『摧邪輪』卷中・下引用 出典注記」、『佛教文化』十四—十七、一九八四年。

《翻刻》

又仏之字、即是菩提也。此義如上出。仏陀此云覺、菩提此云智。名異義同。然、就阿弥陀仏名字、積其義者、若就二字義者、阿字者本不生義、此諸法本際、離空有二辺義也。【十七丁ウ】弥者吾我不可

得、人法二我俱空。謂、依本際不生故也。帶短伊音。即是根本義也。謂、生死本以人法二執為根本。阿字不生心地、此二我都無自性也。此二我無自性、名真如。即是陀字、如不可得義也。此真如性、離情謂四句。是云不可得。且約順觀、逆觀准知。

《訓》

また「仏」の字、即ち是れ菩提なり。此の義、上に出すが如し。仏陀此には「覺」と云ひ、菩提此には「智」と云ふ。名異義同なり。

然るに、阿弥陀仏の名字に就きて其の義を積せば、若し字義に就かば、「阿」字は本不生の義。此れ諸法の本際、空有の二辺を離する義なり。「弥」とは吾我不可得、人法二我、俱に空なり。謂く、本際不生なるに依るが故なり。「短の伊の音」を帶せり。即ち是れ根本の義なり。謂く、生死の本は人法二執を以て根本とす。阿字不生の心地に、此の二我都て自性無きなり。此の二我無自性の処を「真如」と名づく。即ち是れ「陀」字、如不可得の義なり。此の真如性、情謂の四句を離す。是を不可得と云ふ。且く、順觀に約す。逆觀准知せよ。

註

- (67) 『摧邪輪』卷中「若順梵文者、可有云仏念。然仏者菩提也、念義在レ心也。即菩提者一切智智、心者念一切智智心也」、『鎌倉旧仏教』三六〇頁下。
- (68) 【参考】澄觀『演義鈔』、『大正藏』三六、一三三三頁上。
- (69) 「阿」、悉曇十二摩多(母音)の一つ。「一切法教の本源」と積す。阿字本不生の理をさとするには如実知自心の義にして一切智智なり(『密教大辞典』(縮刷)一頁)。

(70) 「伊」、悉曇十二摩多(母音)の一つ。「一切法根不可得」と釈す
〔密教大辞典〕〔縮刷〕一頁。

(71) 「情謂」、「情」は情識、「謂」は言謂・分別や言語をいう。我々の分別(『中仏』中、八三三頁)。

《翻刻》

覺^{スル}知^ル此^ノ義^ヲ人^ノ名^ヲ也。上^ノ三^ノ字^ハ所^レ覺^ス。仏^ノ字^ハ是^レ能^レ覺^ス也。上^ノ三^ノ字^ハ是^レ理^ニ。下^ノ一^ノ字^ハ是^レ智^ニ、理^智円^満滿^ス。為^レ仏^ト。即^チ是^レ菩^提涅^槃二^轉依^ノ果^也。是^レ故^ニ唱^ス此^ノ名^ヲ、即^チ含^ス藏^{スル}無^邊功^徳也。然^レ若^シ無^ク仏^ノ字^ハ、上^ノ三^ノ字^ハ、未^ダ必^ズ人^ナ。唯^レ是^レ諸^ノ法^ノ實^義也。結^{シテ}上^ノ三^ノ字^ヲ属^ス人^ニ、即^チ是^レ阿^彌陀^ノ仏^也。是^レ故^ニ仏^ノ言^者、即^チ是^レ菩^提心^也。

《訓》

此の義を覚知する人を「仏」と名づくるなり。

上の三字は「所覚」。「仏」の字、是れ「能覚」なり。

上の三字は是れ「理」。下の一字は是れ「智」。理智円満するを「仏」とす。即ち是れ菩提涅槃二転依の果なり。是の故に此の名字を唱ふるに、即ち無辺の功徳を含蔵するなり。然るに若し「仏」の字無くんば、上の三字、未だ必ずしも人ならず。ただ是れ諸法の実義なり。上の三字を結して人に属す。即ち是れ阿弥陀仏なり。是の故に「仏」の言は、即ち是れ「菩提心」なり。

《翻刻》

又^チ就^テ【十八丁才】字^ニ義^ニ、旋^転觀^ノ時^キ、順^逆絞^絡、終^ニ歸^ス初^ノ阿^ノ字^ニ。其^ノ阿^ノ字^者、即^チ菩^提心^也。阿^ノ字^ノ觀^義、此^中可^ク廣^ク說^ス。即^チ是^レ阿^彌陀^ノ名^ノ字^ノ体^也。汝^ノ勸^ニ称^ス名^ヲ而^テ以^テ菩^提心^ニ云^フ抑^テ念^ス仏^ト。既^ニ如^シ云^フ我^ノ母^是其^ノ石^ノ女^ト。即^チ犯^ス自^レ語^ノ相^ノ違^ニ也。可^ク咲^シ、可^ク咲^シ。又^チ阿^彌陀[、]此^ニ云^フ無^量壽^ト。然^レ云^フ無^量壽^ト時^ハ、未^ダ必^ズ知^ラ仏^ト、終^ニ云^フ仏^ト時^キ、即^チ是^レ為^ス阿^彌陀^ノ如^來也。【三七二頁下】若^シ爾^者、字^ノ義^ノ句^ノ義[、]俱^ニ以^テ菩^提心^ヲ為^ス仏^ノ体^ト。汝^何以^テ仏^ノ体^ニ云^フ妨^ト碍^ト、仏^ノ体^ニ乎。

《訓》

また字義に就きて「旋転觀」の時、順逆絞絡して、終に初めの「阿」字に歸す。其の「阿」字とは即ち「菩提心」なり。「阿字觀」の義、此の中に広く説くべし。即ち是れ阿弥陀の名字の体なり。

汝、称名を勧めて、而も「菩提心を以て念仏を抑う」と云ふ。既に「汝が母は是れ其の石女なり」と云ふがごとし。即ち自語相違を犯すなり。咲ふべし、咲ふべし。

又「阿弥陀」、此には「無量壽」と云ふ。然るに「無量壽」と云ふ時は、未だ必ずしも「仏」と知らず、終に「仏」と云ふ時、即ち是れ「阿弥陀如来」となすなり。若し爾らば、字義・句義、俱に菩提心を以て「仏体」とす。汝、何ぞ、仏体を以て「仏体を誘碍す」と云ふや。

註

(72) 「旋転觀」、【参考】明恵『華嚴仏光三昧觀秘寶藏』「字輪觀是真言中禅法也。但彼有順逆觀。准常途八定。有順入逆入法。(中略)今字輪定、上置一切法言、下置不可得言。故一一字、皆無非入理門。

故名字輪觀。亦名^三旋転觀」、『大正藏』七二、九六頁中。

(73) 「絞絡(交絡)」、相互に關係しあっていること・入り交じり絡み合
つて数の多いこと(『中仏』上、三〇一頁)。

(74) 「阿字觀」、自己の本源を阿字本不生と觀じて、阿字の一字に自身の
源底を徹見する觀法(佐和隆賢編『密教辞典』〔法藏館、一九八五年〕
六頁)。**【参考】**一行『大日經疏』「此阿字者即是一切諸仏之心」、『大
正藏』三九、七〇五頁下。

(よねざわ みえこ 法然仏教学研究センター嘱託研究員)